

塚田勝郎 著

『新人教師のための漢文指導入門講座』

(B5判・並製・二六〇頁・
本体二二〇〇円＋税 大修館書店)



私事ではあるが、勤務校にて漢文の授業をしていると、生徒から「なぜ中国の古典を勉強しなければならないのか」という質問を受けることがある。学習指導要領を紐解けば、生徒が納得しそうな答えはいくつも載っている。曰く、日本が中国の文化を取り入れ、そこから独自の文化を発展させてきたから。曰く、漢文訓読体が現代でも文章表現の骨格の一つであるから。しかしながら、学生時代に多少なりとも中国古典に触れてきた身としては、こう答えずには

あるが、一番の理由は読んでいて面白いからだ」と。

本書は、漢文指導歴四十一年の著者がその経験を活かし、漢文を指導する上で必要となる知識やコツについて記したものである。しかしながら、本書は「教師が正しく漢文を教えられるようになること」だけを目的

に記されたものではない。それと共に、「教師自身が漢文の面白さを認識すること」も重視している。

中国の古典は面白い。だが、その面白さは生徒にとつてわかりにくい。そこで教師が理解の手助けをする必要があるが、それには教師自身が漢文を面白いものと認識している必要がある。著者も述べているとおり、自分が面白いと思えないものに生徒が惹きつけられることはないのである。

それでは、教師が漢文の面白さを認識するためにはどうすればよいのか。本書では一つの方法が提示されている。それは「自分が面白いと思うまで教材研究をする」というものである。そして、教材研究の一例として、定番教材である『矛盾』において、作者である韓非子が盾と矛を商う者が「楚人」と設定した理由を考察してみることが挙げられている。具体的にどのような考察

ができるかについては実際に手にとつて確認していただくことにして、その他にも漢文の面白さを再確認する上で助けとなりそうなヒントが随所に見られた。この本を通じて、著者の塚田先生に「奥深い漢文の世界に真摯に向き合えば、きっとどこか『面白い』と感じる部分が見つかる」、「生徒もその面白さをきつと分かってくれる」と、背中を押していただいたように感じた。

なお、本書は三章＋資料編という構成になっており、第一章では返り点や書き下し文の指導をする上でのポイントなどがまとめられている。また、第二章では教材研究の方法やノート指導の要点、第三章では定番教材の具体的な授業実践例や評価テストの例が豊富な板書例とともに示されている。巻末の資料編には、漢文を教える上で役に立つブックガイドが載っており、また現役教員や教育実習生からの質問に著者が答えていくQ&Aコーナーなども設けられている。実際に漢文を教えるにあたって役に立つことがらが網羅されており、「新人教師」以外の方にもおすすしたい良書である。

(橘和久・城北中学高等学校)